

天理図書館蔵『一宮紀伊集』の表記

—定家真筆説への疑問—

はじめに

書写の際、同一人物の使用する文字は一定の条件下においては同傾向が認められるという前提を基に、前稿、林田（二〇〇三）では、四つの観点（書写形式・漢字使用・仮名使用・字形）から藤原定家の書写とされている私家集の分析を試みた。その結果、その前提の一斑と天理図書館蔵「實方集」（以下、「実方集」）の表記における特異性とを示し得たかと思う¹⁾。

本稿でも前稿と同様の方法を踏襲し、定家真筆と認定されている天理図書館蔵「一宮紀伊集」（以下、「紀伊集」）の、定家真筆とされている文献内における表記の特異性について分析を加えていきたい。

林田定男

— 検討資料について

まずここで、この「紀伊集」が如何なるものとして認識されているかを確認するため、天理図書館善本叢書の解題（橋本不美男氏）より、以下に書誌等を抄出する。

本書が藤原定家筆であることには、まず問題がないと思われる。
（中略）

縦一三・二纏、横一三・七纏の柀型列帖装。表紙は縹色鳥の子紙に金銀箔砂子散し、中央に「一宮紀伊」と外題されているが、これも定家流である。

右の通り一般的には当該本は（全丁）藤原定家筆と認識されている。それは諸書の記述からでも明らかである。なるほど「紀伊集」の筆跡は一見定家を思わせる。しかし、書風以外では、これを定家真筆とする積極的根拠はないようである。

そこで、次章以降、当該本と、それと同系統の書風を有する定家真筆文献と比較検討を行い、各特異点を指摘していく。

二 書写形式の観点から

定家の著した『下官集』には、和歌の上句と下句を、それぞれ一行書きにすべきことが示されている（「書哥事」）。

前稿において、その書写規範と実際の定家の書写のあり方とを照合し、多くの歌集においてそれらがほぼ整合していることを確認した。

それでは、「紀伊集」の場合はどうであろうか。「紀伊集」は七八首の歌からなる歌集であるが、その約六割に相当する四四首までも、定家が自らが定めた規範に反した形式を取っているのである。

尚、書写形式の問題は、当然のことながら、料紙の大きさ（字高）を考慮に入れなければならない。それについては、野村美術館蔵『讚岐入道集』⁽⁴⁾の存在が示唆的である。その歌集の大きさと書写形式との関係から見ても、この「紀伊集」の特異性が知られよう。⁽⁵⁾

三 漢字使用の観点から

ここでは前稿の考察を踏まえ、「紀伊集」の漢字使用に関する特異点を指摘したい。はじめに漢字字種の一覧を挙げ、次にその詳細を検討していく。

① 漢字一覧

「紀伊集」和歌部分に見られる漢字総数は九九字であり、和歌一首あたりの平均使用数は一・三字である。その内訳は以下の通りである。⁽⁶⁾

〔名詞・副詞〕秋・浦・風・神・神風・君・雲・心ち・心・衣・五月・関・月・名・花・春・火・人・身・水・宮・八十嶋・山・山河・代・夜半・我・小野（以上三〇字種）

〔動詞・形容詞〕思・行（以上二字種）

「紀伊集」は、（藤原定家筆）の歌集としては自筆部分が比較的多量の言語量（七八首）を有しているにもかかわらず、その使用漢字字種及び平均使用数の少なさが目立つ。⁽⁷⁾また、助詞・助動詞には漢字が全く使用されていないのも特徴的である。⁽⁸⁾

しかしながら、それらは本文内容に由来するものではないかという疑問も生じよう。

そのため、次にいくつかの語を対象にした調査（同語間の漢

字と仮名との表記率)から、先の特徴が本文内容とどれ程関係を有しているかを探ってみる。

② 漢字と仮名との表記率

〔表Ⅰ〕 漢字と仮名との表記率表

寛	哉		山		事		思		表記別	
	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字		
8	0	12	7	7	7	0	8	4	紀伊集	
6	0	4	0	0	4	1	0	3	大斎前集	
8	1	2	10	0	13	1	7	7	恵慶集	
16	2	8	14	1	16	6	4	16	23	定頼集

ここでは、前節で指摘した特異点と本文内容との関係について述べる。紙面の都合上、「紀伊集」和歌部分において、漢字・仮名の表記の種類に関係なく、五例以上見られる語の中から選んだ五語の調査結果に、他の定家真筆文献(歌集)の調査

結果を加えて作成したものが、上の〔表Ⅰ〕である。⁽⁹⁾

上表に示した語に限って言えば、「紀伊集」で仮名表記優勢の語のほとんどが、「紀伊集」以外の歌集では逆に漢字表記優勢となっている。このようなことが、「紀伊集」の漢字表記率の低さの要因と考えられ、本文内容の問題は—まず払拭できよう。

四 仮名使用の観点から

ここでは、「紀伊集」和歌部分の仮名使用における特異点を、三つの視点から述べたい。

① 基礎仮名字体について

定家の使用した仮名については、先学諸氏によって数多くの調査⁽¹⁰⁾がなされており、データの蓄積も相当な量に及ぶ。本節では、その膨大な調査結果と前稿の調査結果とを背景にして、基礎仮名字体(所謂「仮名もじ遣」)に関係なく、語のどの位置にも使用が見られる仮名)から特異点を指摘したい。但し、用例数や紙数の関係で、比較的明確に特異性の認められるハ・ナ・ケ・ミの四音の仮名に限定する。

次の〔表Ⅱ〕は、それらの仮名と後の考察と関係のあるラ・オ・ヒの仮名分布の調査結果をまとめたものである。⁽¹¹⁾
⁽¹²⁾

〔表Ⅱ〕 仮名分布表

ナ				ヲ		ハ			音節 各 仮 名	
ル	ナ	ホ	フ	ヲ	ハ	ハ	ハ	ハ		
2	15	3	22	0	12	4	9	7	語 頭	紀伊集
5	1	5	11	0	3	2	8	7	語 中	
2	0	0	2	1	0	2	6	4	語 末	
11	4	2	20	3	24	15	28	3	助詞・助動詞	
0	0	1	1	1	3	0	0	5	語 頭	大前集
0	0	0	3	0	0	0	0	2	語 中	
0	0	0	0	1	0	0	0	0	語 末	
3	0	0	5	0	10	5	3	6	助詞・助動詞	
0	0	7	36	0	11	1	0	12	語 頭	恵慶集
0	1	2	11	1	4	2	2	6	語 中	
0	0	0	0	0	0	1	4	8	語 末	
2	1	0	15	0	30	3	25	41	助詞・助動詞	
0	7	14	58	0	14	3	1	24	語 頭	定頼集
0	1	4	14	0	2	3	3	13	語 中	
0	0	1	1	0	0	4	9	19	語 末	
7	5	1	43	0	97	3	31	118	助詞・助動詞	

ヒ			ミ			ケ				ケ	
ヒ	ヒ	ヒ	ミ	ミ	ミ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ	ケ
0	1	12	11	3	17	0	0	3	6	0	15
1	1	15	2	0	5	0	0	8	2	0	1
0	9	21	18	0	3	0	2	11	4	0	0
0	0	0	6	0	0	0	0	5	13	0	0
0	0	2	0	5	3	0	0	3	2	0	3
0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0
0	2	6	0	0	6	0	1	1	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	4	1	19	16	1	1	2	5	0	11
0	3	2	1	0	6	0	0	0	3	0	0
0	2	9	3	3	10	0	2	0	4	0	0
0	0	0	1	1	4	0	0	1	5	0	0
4	4	27	3	45	15	0	0	1	12	4	42
0	4	12	1	1	21	0	0	4	8	0	1
0	10	23	8	0	10	0	3	37	6	0	0
0	0	0	1	0	8	0	0	0	60	0	0

前掲植・豊田や右表から、ハ・ケ・ミの三音の仮名における定家の基礎仮名字体は、「者（ハ）」、「介（ケ）」、「美（ミ）」であるといえる。しかし、「紀伊集」では、それら三音の基礎仮名字体がそれぞれ「ハ」、「計」、「三」となっている。つまり、定家真筆とされる多くの文献の仮名使用実態と傾向を異にしているのである。また、ナの仮名の使用において「那」の使用数の多さにも目を引かれる。

② 仮名充当について

〔表Ⅲ〕 仮名充当表

日			見			意味
ひ	り	ひ	み	ん	み	
0	4	1	4	3	13	紀伊集
0	1	0	0	4	0	大斎前集
0	1	0	0	20	0	恵慶集
0	4	1	1	45	3	定頼集

清水義秋（一九七三）や柴田雅生（一九九二）では、定家真筆の御物本『更級日記』（以下、「更級日記」）、尊経閣文庫蔵『土左日記』（以下、「土左日記」）、伊達家旧蔵無年号本『古今和歌集』（以下、「伊達本」）等における「見」及び「日」の表語性の高さが指摘されており、前稿の調査で定家筆の歌集においてもその傾向の存在を確認した。

しかし、「紀伊集」の場合、上

の〔表Ⅲ〕から明らかのように、「見」については表語性が認められない。

③ 定家仮名遣⁽¹³⁾について

先に触れた『下官集』には、周知の通り、仮名遣の実例も挙げられている。それらと、定家真筆文献やそれに準じる文献におけるその具体的用例とはほとんど一致していることや（藤原定家の仮名の用法には一定のきまりがあり、「於」「を」の区別⁽¹⁴⁾は厳重で、かつ、歴史的仮名遣に合致しないものが多いこと）が大野晋（一九五〇）、そして（一九八二）によって実証された。それでは、「紀伊集」ではどうかであろうか。

大野晋（一九八二）収載の「仮名遣の起源についての研究」資料に挙げられた定家真筆文献及びそれに準じる文献中の使用実例と齟齬をきたしている語のみを取り上げて述べると、「紀伊集」和歌部分には、定家の使用実例に合わない例が四語ある。それは、七一番歌の「をひ（若生ひ）」、六一番歌の「をし（惜し）」、四八番歌の「おのづから」、六〇番歌の「おき（頼め置き）」、である⁽¹⁵⁾。しかも、その中の「をひ」はいわゆる歴史的仮名遣にも相違する。

五 字形の観点から

「紀伊集」の仮名には、他の定家真筆（部分を含む）とされる文献群には見られないような形のもの、しばしば認められる。また、漢字についても同様である。以下に、特に相違の甚だしい「部（へ）」・「越（ヲ）」・「遣（ケ）」の各仮名字体、漢字「夜」、詞書「返し」、の字形について述べる。

尚、本観点では、これまでの検討で比較対象として取り上げた文献に加えて、より幅広い文献を「紀伊集」の比較対象資料とする。その理由は前章までの検討とは異なり、少なくとも定家の場合、文字の形までは書写内容に大きく影響されることはないと考えられるからである。新しく「紀伊集」の比較対象とする文献を列挙すると、冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』（以下、「拾遺愚草」）、同嘉禄二年四月書写本『古今和歌集』（以下、「嘉禄本」）、同『後撰和歌集』（以下、「後撰集」）、安藤積産合資会社蔵『拾遺和歌集』（以下、「拾遺集」）、酒井家旧蔵『近代秀歌』（以下、「近代秀歌」）、大橋家蔵『源氏物語奥入』（以下、「奥入」）である。

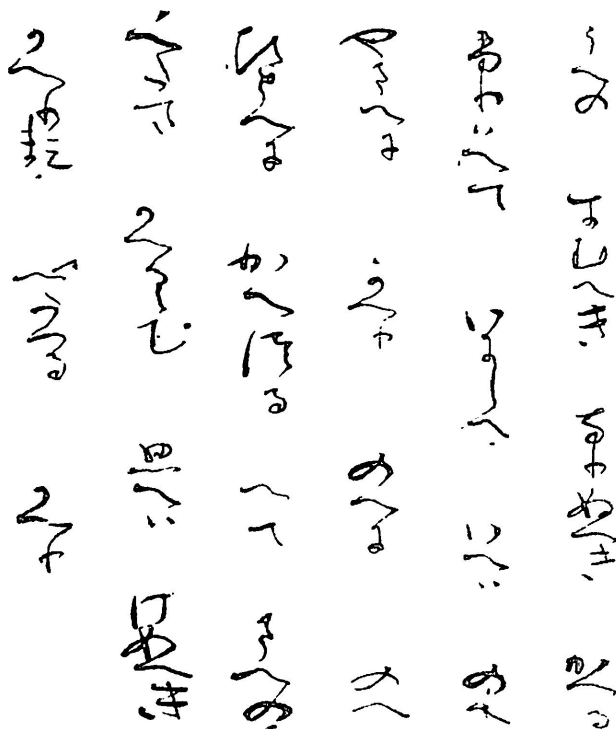
① 仮名字体「部」について

〔図版Ⅰ〕で挙げたのは和歌部分の全例である。そこで示すように、「紀伊集」の「部」の右側部分のほとんど全てに屈曲

が認められるのに対して、他の定家真筆とされている文献群では、そのような例はほとんど認められない。

〔図版Ⅰ〕 仮名字体「部」

- ・ 紀伊集（七・九・一〇・一一・一五・一七・二〇・二六・三二・三三・四〇・四七・四九・五三・五四・五八・六三・六七・六九・七五）七七番歌



・ 惠慶集 (八・二四・二九・七六番歌)

ちくつ のの 秘(よ) じふふふ

・ 定頼集 (三三・七五・七八・一三一番歌)

んふき ま ちくつ いふふ

・ 拾遺愚草 (三三・一六一・一九七・二七七三番歌)

かろ ふふふん ぶふふ 月ふ

・ 嘉禄本 (一九〇・三七五・七三四・八三七番歌)

ふふふふふ けふふ けふふ けふふ

・ 拾遺集 (二二・五〇八・六五五・六六〇番歌)

うふ 伊ふ けふ けふ けふ

・ 更級日記

かろ けふふ(ま) けふふ けふふ

② 仮名字体「越」について

〔図版Ⅱ〕で示した「越」の右上方に向かう線の角度は、「紀伊集」のものと、その他の定家真筆とされている文献のものとは明らかな違いが認められる。この違いが「紀伊集」の「越」を扁平で、しまりのない字形に見せている。

〔図版Ⅱ〕 仮名字体「越」

・ 紀伊集 (二・一九・三四・五四番歌)

る けふ けふ けふ けふ けふ

・ 拾遺愚草 (一七二・一七七六・二七八八番歌)

けふ けふ けふ けふ

・ 伊達本 (二〇・二六・一一〇四番歌)

けふ けふ けふ けふ

・ 後撰集 (二八五・二九三・八六三・一一三四番歌)

けふ けふ けふ けふ

・ 拾遺集 (二八・五七一・七〇二・一一二六番歌)

けふ けふ けふ けふ

③ 仮名字体「遣」について

〔図版Ⅲ〕で示すように、「紀伊集」以外の定家真筆とされている文献では第一画目が横画であるが、「紀伊集」ではそこが点二つの連続となっている。

〔図版Ⅲ〕 仮名字体「遣」

・紀伊集（六六・七〇番歌）

あやあきの月
あやあきの月

・恵慶集（九・三三・三三三番歌）

あきつ
あきつ
あきつ

・定頼集（一・二四・一五一番歌）

あきつ
あきつ
あきつ

・拾遺愚草（二四一・一九八二・二六〇八番歌）

あやあきの
あやあきの
あやあきの

・伊達本（二三四・六二五・六三九番歌）

あきつ
あきつ
あきつ

・嘉禄本（二八三・六三八・九九四番歌）

あきつ
あきつ
あきつ

・後撰集（二四一・一一〇四・一二九六番歌）

あきつ
あきつ
あきつ

・近代秀歌

あやあきの月
あやあきの月
あやあきの月

・更級日記

あきつ
あきつ
あきつ

・奥入（「角総」「うき舟」「かけるふ」）

あきつ
あきつ
あきつ

④ 漢字「夜」について

〔図版Ⅳ〕で示すように、「紀伊集」に見られる「夜」は、その他の定家真筆とされている文献群と比較すると「夕」部分の回転箇所が縦画と離れた位置にあるため、より扁平さが強調された字形になっている。

〔図版Ⅳ〕 漢字「夜」

・紀伊集（七番歌・三一三番歌詞書、六六番歌）

あきつ
あきつ
あきつ

・恵慶集（二九・七一番歌、七三番歌詞書）

あきつ
あきつ
あきつ

・拾遺愚草（二〇〇二・二二七〇・二二七二番歌）

あきつ
あきつ
あきつ

・嘉禄本（二七二・一八一・一九五番歌）

し表 夏 秋の夜は月

・後撰集（一八八・二三七・三三三番歌）

夏 秋の夜は月

・近代秀歌

夏 秋の夜は月

・更級日記

夏 秋の夜は月

・奥入（「夕顔」「陋麻」）

夏 秋の夜は月

⑤ 詞書「返し」について

〔図版Ⅴ〕から明らかのように、「返」の偏と旁の位置関係、「返」と「し」との接続部分の角度、いずれも「紀伊集」とその他の定家真筆とされている文献群とは趣を異にしている。

〔図版Ⅴ〕 詞書「返し」

・紀伊集（二一・二四・三〇・三八・七六・七八番歌詞書）

返 返 返 返

返 返 返 返

・惠慶集（七七・七九番歌詞書）

返 返

・定頼集（二一・一五五・一八七番歌詞書）

返 返 返

・拾遺愚草（二六三八・二七二九・二七三二番歌詞書）

返 返 返

・伊達本（六五五・七八五・一〇〇八番歌詞書）

返 返 返

・嘉禄本（四七七・六四六・七八五番歌詞書）

返 返 返

・後撰集（七一・七三四・一四一八番歌詞書）

返 返 返



おわりに

定家真筆と称されている「紀伊集」の特異性を四つの観点から指摘してきた。それぞれの特異点は、個別的に見ると偶然の結果と言える様なものであるかもしれない。しかしながら、それらを包括的に見ると「紀伊集」を他の定家真筆文献と同等の取り扱いをすることについては、前稿で取り上げた「実方集」と同様に、大きな疑問を感じざるを得ないのである。⁽¹⁷⁾

かりに、このままこれらの文献を他の定家真筆と同等に見なすのであれば、表記研究や筆跡研究等の方法及びそれらによって導き出された結論、そしてそれに関連する諸事項は、修正、再検証を迫られる部分が少なからずあろう。ことは定家筆の資料だけの問題に止まらないのである。

故に、本論の当否に拘らず、いずれにしてもこの種の検討の必要性を鑑み、問題を提起した次第である。

〔註〕

(1) 前稿の検討では、「実方集」以外の定家真筆(部分を含む)と認定されている種々の文献は表記上の大きな特異点が見つからなかつたので、検証が不十分な点もあるが通説に従う。よって、本稿では便宜的にそれらを定家真筆文献と認識して、以下、論を進めていく。また、本稿で新たに取り上げる定家真筆とされる文献も同等の取り扱いである。

(2) この「紀伊集」の筆致について、中央公論社刊「書道藝術」第一六巻の図版解題(久保田淳氏執筆部分)には(古今名所や寂然集などよく似た闊達な書である。おそらく壮年の頃の書写になるものであろう)とあり、また、財団法人五島美術館発行の五島美術館展覧会図録「定家様」の第二章(名児耶明氏)には(流麗さ、連綿などは晩年にはみえない特徴である。五十代頃の書写か)とある。これらの記述に基づき、名児耶明(一九九九)の定家の書風分類(全四期)で第三期と第四期(五〇歳以降)の書写に相当する文献或は同一書風を有する文献を比較対象とする。

(3) これらの歌の書写形式は、三句目途中から改行されているものが二三首(四、七、一一、一四、一八、二二、二七、

二八、三〇、三二、三六、四一、四四、四五、五三、五五、五九、六四、六八番歌)と最も多く、次いで三句目冒頭から改行されている一五首(一、九、二三、二九、四三、四六、四七、五四、五七、六三、六六、七一、七二、七四、七七番歌)、そして三行書きのもの五首(四二、四九、六〇、六五、七五番歌)、となっている。歌番号は角川書店刊『新編国歌大観』を参考にして付した。以下、同。

尚、「紀伊集」は二行目以降の行頭の位置が様でないため、一行目の行頭とほぼ同位置から書き出されている文字列を二行目、三行目と定めた。

(4) 講談社刊『古筆学大成』第一九卷所収。

(5) 前掲『古筆学大成』の解説(小松茂美氏)によると、『讃岐入道集』の寸法は(縦一一・四センチメートル、横一一・九センチ)であり、基本的に「五七/五七/七」の三行書きの書写形式である。そして、「紀伊集」とは異なり、和歌部分の行頭の位置が安定しているため、行の認定に難渋することもない。

(6) 掲出方法等は前稿に準ずる。

(7) 冷泉家時雨亭文庫蔵『惠慶集』(定家筆部分一〇一首)は漢字字種総数九六、平均使用数二・九、出光美術館蔵

『四条中納言集』(一八九首)は漢字字種総数八三、平均使用数二・一である。具体的には林田(二〇〇三)参照。

(8) 註(7)で挙げた二文献共に助詞・助動詞の使用例が見られる。

(9) 助詞・助動詞については、漢字表記の例が皆無であるので、用例が五つ以上ある語中、他文献の調査から漢字表記が期待できそうな二語を取り上げた。尚、表中にある「大斎前集」は日本大学図書館蔵『大斎院前の御集』の定家筆部分、「惠慶集」は冷泉家時雨亭文庫蔵『惠慶集』の定家筆部分、「定頼集」は出光美術館蔵『四条中納言集』を指す。以下、略称する。

(10) 植喜代子(一九七九)、豊田尚子(一九九二)等。

(11) 小笠原一(一九七六)には「越」の仮名字体の使用の側面から、(文字づかい)のうえでの「紀伊集」の特異性が述べられている。

(12) 数字はすべて和歌部分のものであり、ミセケチ訂正の文字も含む。

(13) ここでいう定家仮名遣とは、定家が『下官集』で示した例と、実際の定家の使用例とを合わせたものの謂である。

(14) 大野晋(一九八三)二〇頁。

(15) このような例は詞書部分にも見られる。二三番歌詞書に

「をし(口惜し)」、二五番歌詞書に「をり(時の意)」。

(16) 掲出図版は紙面の都合上、限界がある。仮名字体「越」と詞書「返し」については、前稿と併せて見ていただければ幸いである。

(17) 定家真筆と認定され、本稿でも定家真筆文献として取り扱った「土左日記」は、藤本孝一(一九九四)及び片桐洋一(一九九八)では同一文字間で字形を整える箇所が存在することを大きな論拠に、側近筆の可能性が指摘されている。

この問題を解決するにあたって、有益になり得る事例が、夙に勝峯月溪(一九七〇)九一七頁に述べられている。以下、それを敢て紹介させていただく。

又新潟醫大の藤原教悦郎博士は「或文字を他の文字に書き直した時、即文字の上に更に他の文字を書き重ねた時は、最初の文字の墨汁が、未だ乾かない中に他の文字を書く時は、両墨汁が混和するが最初の文字が乾燥した後に爲された場合には両文字が混和しないから、顕微鏡又は廓大寫眞によつて検する時は、兩層を區別し得るであらう」との見解の下に、金子請取證に於ける「右之。利子」の語を「右元利子」

と改竄されたものを、看破した實例を示された。

右の方法を用いて先の「土左日記」の問題の箇所を分析し、その全ての箇所が(両墨汁が混和)している状態であれば、全丁定家筆の可能性が俄然高まる。勿論同様の問題箇所を持つ「惠慶集」「更級日記」「後撰集」「奥入」、そして前掲藤本で全丁定家筆が疑問視されている「拾遺愚草」等、数多くの定家筆と称されている文献の調査も必要である。しかし現在では、より有効且精密な分析方法が開発されていることであろう。改めて述べるまでもないが、文学作品研究の分野においても、より積極的に理工学的研究方法を導入(理系研究者と連携)し、その成果をも基盤にしていくことが、今後ますます求められるものと思われる。

「テキスト」

八木書店刊 天理図書館善本叢書 第四卷『平安諸家集』（一九七二）

朝日新聞社刊 冷泉家時雨亭叢書 第二卷『古今和歌集 嘉禄本』（一九九二）・同第三卷『後撰和歌集 天福二年本』（二〇〇四）・同第八卷『拾遺愚草 上中』（一九九三）・同第九卷『拾遺愚草 下』（一九九五）・同第十八卷『平安私家集 四』（一九九六）

平凡社刊 出光美術館蔵品目録 『書』（一九九二）

笠間書院刊 『伊達本古今和歌集藤原定家筆』（一九九六）

汲古書院刊 『藤原定家筆 拾遺和歌集』（一九九〇）

二玄社刊 日本名跡叢刊 三三三『鎌倉・藤原定家 近代秀歌』（一九八七）

笠間書院刊 『更級日記 翻刻・校注・影印』（一九七九）

ほるぷ出版刊 複刻日本古典文学館 『源氏物語 奥入』（一九七二）

〔引用・参考文献〕（本文で詳述したものを除く）

浅田 徹（二〇〇〇） 「下官集の諸本・付・大東急記念文庫

蔵「定家卿模本」翻刻・」（『国文学研究資料館紀要』第二六号）

（二〇〇一） 「下官集の定家・差異と自己・」（『国文学研究資

料館紀要』第二七号）

植喜代子（一九七九） 「藤原定家の変体仮名用法について」（『国文学攷』第八二号）

小笠原一（一九七六） 「定家自筆本のかなの用法・「越」の

場合」（『学芸国語国文学』第一二二号）

大野 晋（一九八二） 『仮名遣と上代語』（岩波書店）

片桐洋一（一九九八） 「土左日記」定家筆本と為家筆本」

（『国文学』第七七号）

勝峯月溪（一九七〇） 『古文書学概論（全）』（国書刊行会）

小松英雄（二〇〇〇） 『日本語書記史原論 補訂版』（笠間書院）

柴田雅生（一九九二） 「定家自筆仮名資料の漢字字形と仮名」

（『活水日文』二三）

清水義秋（一九七三） 「定家の用字と注釈意識・漢字の場

合・」（『相模工業大学紀要』第七卷第一号）

清水義昭（二〇〇一） 講演「尊経閣文庫蔵『土左日記』は定家

右筆本にあらず」（『松学舎大学東洋学研集刊』第三一集）

豊田尚子（一九九二） 「藤原定家自筆の平仮名分における仮

名の用法について」（『国文学攷』第一三六号）

名兎耶明（一九九九） 「定家の若書き書風について」（『書論』

第三一号）

林田定男（二〇〇三） 「天理図書館蔵『實方集』の表記・定家真筆説への疑問・」（『国文学』第八七号）

藤本孝一（一九九四） 「尊経閣文庫蔵『土左日記』（国宝）の書誌的研究」（京都文化博物館研究紀要「朱雀」第七集）

村田正英（一九九二） 「定家自筆仮名文における漢字・仮名同形字について」（『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院）

依田 泰（二〇〇〇） 「『土左日記』定家本と為家本に関する一考察」（『學習院大學国語国文学會誌』第四三号）

（はやしだ さだお／本学大学院生）